

調査の成果（道路の前後の時代）

集落があった古墳時代 令和2年度調査において22棟の^{たてあな}たてものあと^のの竪穴建物跡が検出されました。古墳時代前期のものと古墳時代後期のものに大別でき、前期のものは7棟、後期のものは15棟見つかりました。いずれも方形です。

古墳時代前期のものは一辺が4～5m前後のものと7m前後のものがあります。古墳時代後期のものは一辺が4～5m前後となっています。古墳時代を通じて、人びとが暮らす集落だったと考えられます。これらの竪穴建物跡は7世紀前半までに^{まいぼつ}埋没しており、古墳時代に形成されていた集落は姿を消しました。

竪穴建物跡に伴って^{かめ たかつき はじき つきみ}甕や高坏などの土師器や、^{つきふた すえき}坏蓋などの須恵器が出土しました(写真5・6)。

古代東海道、その後の高野遺跡 古代東海道の側溝跡からは9世紀の初めごろまでの土器が出土していることから、令和2年度調査で見つかった古代東海道はこの時期を中心として機能していました。

当地は野洲川や葉山川に挟まれた地域であり、近代まで^{はんらん}両河川の氾濫による水害が起きていました。古代東海道もそのような水害の影響で近世東海道の位置に移転した可能性もあり、近世東海道は高く安定した場所を求めて移転したと考えられます。

古代東海道が廃れた後、令和2年度調査地では建物などの生活の痕跡が途絶えます。そのため、このころを境に当地域は田畑の広がる地域にかわっていったのでしょう。

室町時代には不要になった信楽焼のすり鉢や瓦(軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦)といったものを捨てていた痕跡がありました(写真7)。いずれも15世紀後半ごろと考えられます。調査区南側には中世の城館跡や、中世に当地へ移転したと伝わる寺院があるので、そういった施設の人びとに使われていたと考えられます。

まとめ

令和2年度調査成果を以下のようにまとめます。

古代東海道と考えられる道路跡を発見し、平安時代初頭における古代東海道のありようを考える上で、貴重な成果を得ることができました。人びとの暮らす集落から、古代の主要幹線道路に変化する高野遺跡の軌跡を追うことができました。

今回の調査では、当地における古代東海道の成立時期が判然としなかったものの、令和3年度調査においても引き続き古代東海道推定位置の調査を予定していますので、新たな発見があるかもしれません。



写真5 竪穴建物跡から土師器が出土したようす (古墳時代前期)



写真6 竪穴建物跡から須恵器が出土したようす (古墳時代後期)



写真7 すり鉢と瓦が出土したようす (室町時代)

レトロ・レトロの展覧会 2021 特別陳列1 東海道を探る PART 2 ～すがたをあらわした 古代のハイウェイ～

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

はじめに

遺跡の概要 高野遺跡は栗東市高野・辻・六地藏に所在する遺跡です。野洲川の左岸扇状地に位置していません。昭和57年(1982年)の宅地造成に伴う調査が実施されて以来、複数回の発掘調査が実施されていて、縄文時代前期(約7,000～5,000年前)から近代にかけての遺構・遺物が発見されています。特に古墳時代(3～6世紀、約1,800年前～約1,500年前)には県内でも有数の大規模集落の広がりが確認され、古墳時代前期を中心とした時期の集落が形成されていました。

調査の経緯 高野遺跡の範囲内において、滋賀県大津・南部農業農村振興事務所により六地藏地区ほ場整備工事が計画されたため、それに先立つ発掘調査を平成30年度から着手し、本年度も調査を継続中です。

令和元年度調査では古代東海道推定位置付近で倉庫と考えられる奈良時代の掘立柱建物跡などが見つかっています。

今回の展示 今回の「レトロ・レトロの展覧会2021」では、令和2年度調査で見つかった奈良時代から平安時代初頭にかけての古代東海道と考えられる道路跡や同時期の旧河道跡などの遺構と出土した遺物について紹介します。

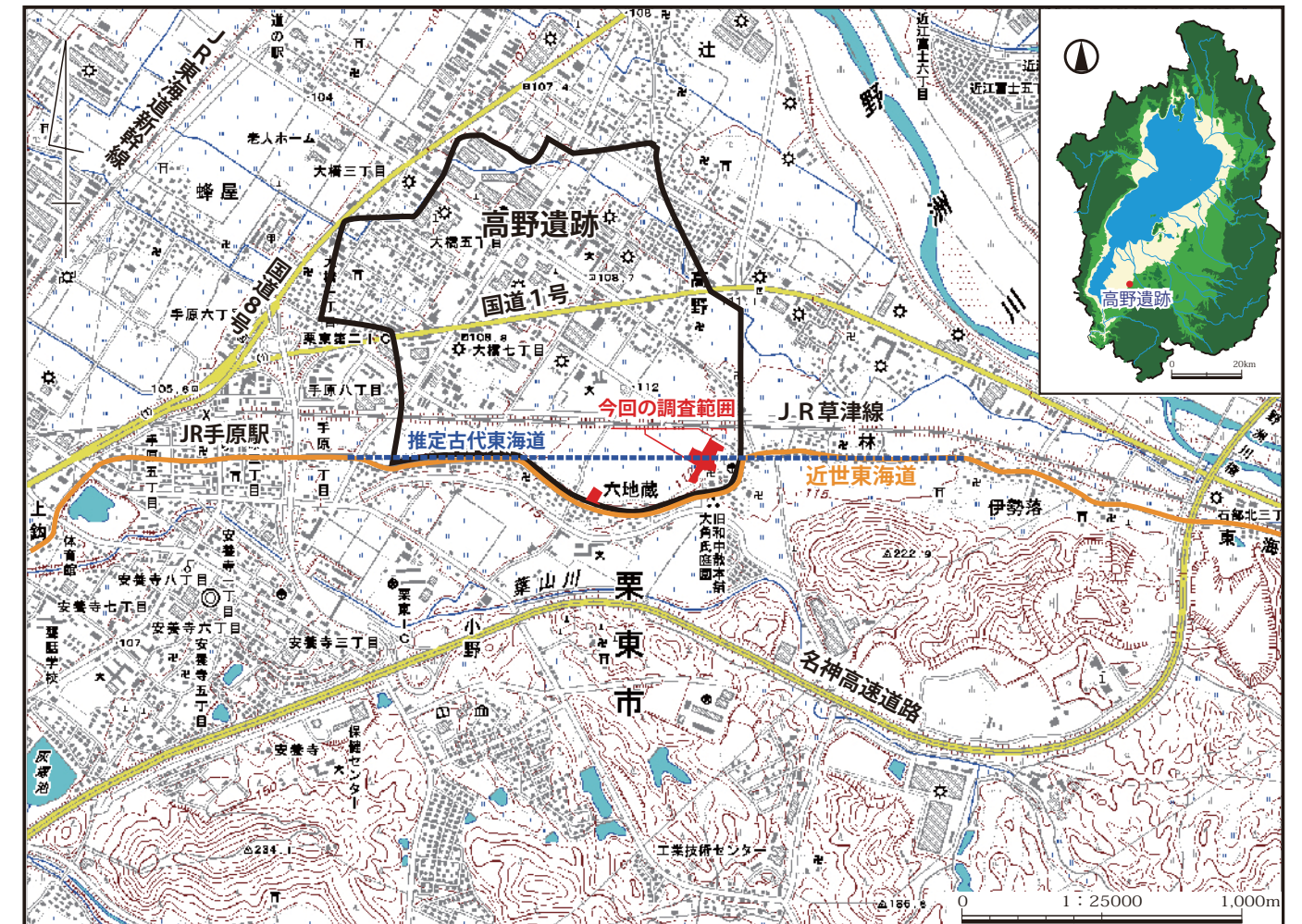


図1 高野遺跡の範囲(黒枠)と今回の調査範囲(赤色塗部)

調査の成果（古代東海道編）

調査の結果、東西に並行する2条の溝跡が検出されました(図2)。この2条の溝は道路の側溝と考えられます。このうち南側の溝跡は、令和元年度調査で見つかった倉庫の北側の溝の延長となります(図3)。また、歴史地理学で想定されている古代東海道のルートにも合致していることから、道路跡は古代東海道側溝跡と考えられます。

溝と溝の中心の距離は約16mを測り、幅の広い直線的な道路があったようです。道路として整備された時期は判然としませんが、出土した土器の形式から、8世紀の終わりから9世紀の初めを中心とした時期に機能していたようです。



写真1 北側溝跡の掘削の様子



写真2 東海道の南から三上山を望む
(赤塗が北側溝跡部分)

東海道 古代の行政区画の五畿七道の内の七道の一つで、古代に整備された官道です。東国経営の交通路とされ、天武天皇のころ(7世紀後半)にはほぼ成立していました。成立時は大和国から伊賀国を通り、東国に抜けていましたが、延暦3年(784年)の長岡京遷都以降に近江国を通過するようになります。

近世東海道は、慶長6年(1601年)、徳川家康の朱印状によって各宿に伝馬(荷駄や人を運ぶ馬)を出すことを伝えられ、宿場町の整備がされました。

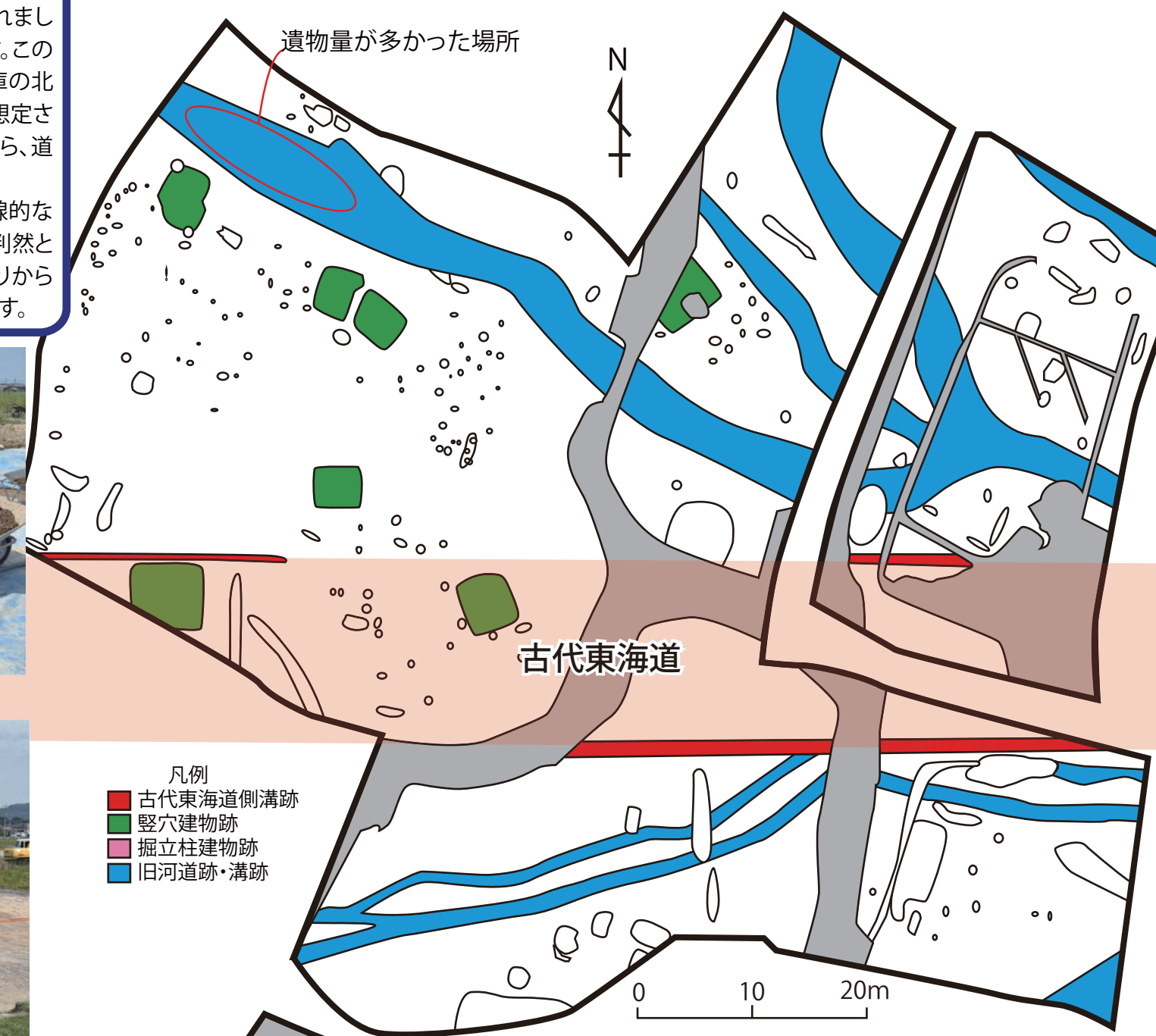


図2 遺構配置図(S=1/500)

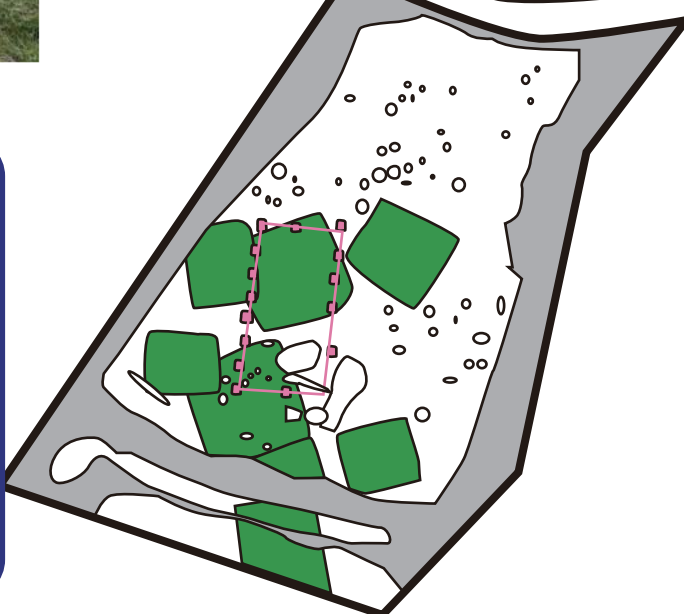


図3 令和元・2年度調査遺構図(S=1/2,500)



写真3 手原方面を望む(赤塗が側溝跡)

旧河道跡 道路の北側には旧河道跡が見つかりました(写真4)。この旧河道跡に伴って古墳時代から平安時代初頭までの幅広い時期の遺物が出土しました。特に西側(図2中赤丸部分)での遺物の出土量が多く、かつ、不良品のような土器も見られることから、物資の集積場があった可能性があります。今後の調査で周辺施設などが明らかになるかもしれません。



写真4 東海道北側の旧河道跡(西から)